

[TOP](#) > [国内](#) > [世界の中の日本](#) > [来年導入の英語スピーキング試験、百害あって一利なし](#)

[時事・社会](#) [教育](#)

来年導入の英語スピーキング試験、百害あって一利なし

受験産業を儲けさせるだけで実力向上はまず望めない

2018.5.11（金） 伊東 乾



留学に関連するイベント会場で家族と共に海外留学の状況などを聞く参加者（中国で）。
(c)CNS/張斌〔AFPBB News〕

都立高校の入試に「英語のスピーキング試験」が導入されるという報道がありました。

2019年から試験導入とのこと、正確にどのようなカレンダーになるのかはこれかららしいですが、最初にこれに水を差しておきたいと思います。

「英語のスピーキング試験」は失敗すると思います。

正確に言うなら「スピーキング試験導入」で各種の産業は回るだろうと思います。やれ試験対策だということで、各種受験産業も様々な商品を開発することでしょう。

それで、例えば「2025年とか2030年に日本人の英語を話す力が伸びているか？」と問われれば、まずそのような期待はしない方がいいと思います。

理由は「リスニング」試験導入とその「使用前使用后」を見ているからです。

大学入試センター試験に「リスニング」が導入されたのは2006年のことだそうです。

私たちにとっては入試は年中行事なので、いつの間にか導入され、事前に煩瑣なリスニング問題実施のための機器チェックなどの義務が増え、面倒がまた増えたと思ってからかれこれ10年くらいか・・・とっていました。

1999年以来、私が教籍を置く東京大学では、いま調べてみると、2006～07年が試験導入だったようで、合否に成績を算入せずとし、2008年以降は現在に至るまで、普通にヒアリング試験を実施しています。

それで、英語の「ヒアリング能力が上がったか？」と問われれば、若干上がったのかもしれませんが。テキストを与えて声に出して読ませてみると、以前より発音が良い学生の割合が増えているような気がします。

「だったら、試験の効果があったと言ってもいいんじゃないか？」という声が聞こえてきそうですが、まあちょっと待ってください。英語って、ヒアリングテストなり、何ちゃらテストなりの成績が良ければそれでOKという教科でしょうか？

ヒアリングテストの導入以降も、例えば「英語だけで実施する学部・大学院講義」の履修率は、少なくとも東京大学の場合、かなり惨憺たるものがある現実があります。英語で開設するゼミなどはすごいことになります。

まず、日本人が少ない。と言うかほとんどいない。よくしゃべるのは海外からの留学生で特に女子でやる気まんまんの学生が、ほとんど独壇場のように活発に議論に参加するケースが多い。

一番だらしがないのは日本人の男子で、ほとんど教室の備品になったがごとく、黙って静かにしている。

長年の親友、ケネス・ペクター法政大学ビジネススクール教授の表現を借りるなら「Change the mindset! チェンジ・ザ・マインドセット！（性根を据え変えろ！）」です。

これが本質的な部分で、「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」何のと、お役人と管理職が机上の空論を戦わせても、本質的な語学能力の動機、インセンティブが皆無に近い現実では高くを望めない。

入試科目とその点数で釣って、1つか2つ芸風を増やさせたからといって、およそ英語能力、もっと言えば国際的に新しい世代の日本人が主体的な活躍を見せるような展開に、およそ近づいていくなど想像もできない。

語学に向き合う気持ちがない

これが一番よく分かるのは、今のシーズン、大学2年生たちに拳手させて、第2外国語をどれくらい使えるかを見てみると、如実です。

かつてはドイツ語、フランス語などが多かったですが、最近は中国語やスペイン語という学生も増えました。

そこで、それら「第2外国語」で自由に会話できるかと訊ねると、まず99%の学生（男子が大半）は照れ笑いのような表情で「全然ダメです」と答えます。

私はゼミナールに欧州各国語のプリントを使うので、実際に1年やったはずの言語で初見のプリントを読ませてみたりすると・・・。まあ、お察してください。まともに発音できないことも珍しくありません。

少なくとも、第2外国語については、新しい語学を身に着けて縦横に活用するという「マインドセット」は、日本人学生全般には全くない。そう断言しても残念ながら外れないように思います。

「第2外国語で測れるのか？」とお訪ねの方があられるかもしれません。私も伊達に20年間大学の教壇に立っていません（笑）。その場で言語を英語にスイッチしてゼミを続けたりすると、大体似たようなことになります。

ちなみに、私たち西欧音楽の人間は、例えば声楽やオペラの歌詞などが分かりやすいと思いますが、主要な数か国語を移民外国語として使い倒していかないと、とりわけ若いときはご飯を食べていけません。

ベートーヴェンのト書きは読むけどドビュッシーはチンプンカンプンでは、趣味ならともかく仕事、特に人を指導する立場としては、やっていくのは厳しい。語学については、プラクティカルな観点からシビアな環境で、私などはむしろ怠け者の部類に属します。

翻って、「日本に留学に来ている外国人学生」ではどうでしょう？

「本格的な島国根性」は小手先で克服できるか？

教養1、2年のゼミには、学部入試を日本人と一緒に受けて合格してきた中国の学生などが一定の割合で参加してくれます。

彼らは例外なく、よどみない日本語を話します。そもそもこれがまず外国語です。

1年間学んだはずの欧州言語、例えばドイツ語やフランス語で話しかけてみると、いろいろ言葉に詰まったりすることはあっても、8割は通じる欧州語でコミュニケーションが取れます。

これはもう、日本人学生と比較対照すると、あまりにも明らかかつ如実です。ここ20年、その差はむしろ拡大しているように思います。

今年、私の研究室では大学院に国費留学生を迎えました。韓国からの留学生Lさんは、すでに10年前、早稲田大学に留学歴のある大人で、淀みなく流暢な日本語で話し、漢字カナ交じりのメールで普通にやり取りをしてくれます。

私の研究室では、志望者に東京大学の学部入試試験を解いてもらうルールになっています。

理由は簡単で、大学院を志望するなら、学部レベルがクリアできていなければ学歴ロンダリングになりかねませんから、学部入試レベルがクリアできた人をもっぱら採用していることによります。

日本語で出題された英語も数学も、きちんと解答して合格答案を提出してくれた人にゼミナールなどに参加してもらうようにしています。

厳しいと思われるかもしれませんが、どこかにルールとして歯止めを作っておかないと、学力に水準を設けることができません。私のところではそれを学部入試に置いています。

別に満点を取れなくてもよい。筋道をもってきちんと問題に取り組む基本的な姿勢、もっと言えば、まじめにコツコツと、でも快活に問題に取り組める人が、私のところには向いているからです。

そうでない人は、仲間として一緒にやっても多分つまらないだろうから、「向かないところに来てはハッピーではないかもしれませんよ」という注意喚起でもあります。

ここで、話を冒頭の「スピーキング試験」に戻しましょう。私が危惧するのは以下の2つのパターンです。

第1は、受験産業の対策トレーニングに過剰適応してしまった「オウム返し電子秘書状態」とでも表現すべき**パブロフの犬化**リスクとでも言えばいい

でしょうか。

こういうことを言われたら、こんなふうに戻しておけば少なくともバツはつかない……。多くの受験産業はコレ式の「安全指導」に流れやすく、その人の人となりも正確も適性も、何も反映しない紋切型の「スピーチ」が氾濫するようなリスクです。

もっと露骨に言うなら、どこでも同じ受け答えしかしない、役所の窓口かファストフードのマニュアルみたいな、ロボット応答が流布するような恐怖感があります。

しかし、これよりもっと凄まじいのは、第2のリスクです。

これは試験をクリアなり不合格なりしたあとの生活習慣で予想される、それこそ恐怖としか言いようのない副作用で「インコ・オウム型」の反応とでも言うべきもの。

何を問われているのかよく分からないけれど、何かともかく言っておかないと、白紙相当だと零点だとばかりに、口の方が先にまくし立ててしまう。現実にはこちらの方がたくさん出てきそうな気がします。

こういうリスクは、どういう出題と採点の形式を取るかによっても、大きな変化があるはずで。

私がいま念頭に置いているのはTOEFLなどに先行例のあるスピーキング・テストですが、人数、実施や採点にかかるコストなど考えると現実にどのような形に落ち着くのか、まずその時点でかなり心配です。

とりわけ、ヒアリングの能力が不足していても、択一テストの鉛筆ころがし方式よろしく、あてずっぽうスピーチなどという、片翼飛行が蔓延したりすると、新たな「副作用」が生じかねない気がします。

実際、マークセンス・テストでは、ヤマカンで当たってラッキー、的な話を耳にしないわけではないでしょう。採点のシステム化も、どのようになるのか相当気になります。

私は母が英語教師でしたので、語学の教育にはいろいろ思いがあります。本質的にコミュニケーションしなければ、という主体的なインセンティブがあるとき、語学の力は大きく伸びます。

見知らぬ土地に単身渡れば、1～2週間で最低限の生活はできるようになったりもする。不易流行と思います。

逆に人為的な「新テスト」導入などが、真の意味での実力涵養に結びついた例を、教科の別なく、ぱっと思いつきません。

今回にしても、いつか来た道・・・となるのを恐れるというのが本稿の基本的な趣旨、あらゆる「言い訳」を突破口に、本当の意味で国際社会に大きく雄飛するメンタリティをもった若い人が増えてほしい、と長年心から思い、持ち場では努力もしているため、疑問も多く持たざるを得ません。

性根がしゃんとしていれば、人は慎重になります。また、イージーな試験の形式があれば、イージーなスピーキングの流布があっても不思議ではない。

端的に言うなら、話の中身の何割かが分からなくても、相槌代わりに無意味なイエスとか答えてしまう「スピーキング試験対策」病の蔓延が懸念される。

聞き取る能力を鍛えることなく何か口が勝手に動くという、かなり危ない促成栽培の濫造になりかねないのを恐れるわけです。

実のところ、世の中にすでにそこそこの数、こういう症例は存在しています。

理解やリアリティがないまま、口先だけ夢遊病のように動くという状態で、下手に「スピーキング・テスト」対策で丸暗記などやらせて、そういう状況を増やしてしまうリアルな危惧感を覚えます。

こういうことをビジネス現場でやってしまう、よい年をした人を何人が知っています。回りは大迷惑します。

ご本人は中身が分かっていないのですが、調子だけはいいので外国人相手にイエスとか答えてしまう。その結果、後になってとんでもないことになり、收拾で大変な目に遭ったことが一度ならずあります。これはいけません。

ちなみに私は、分からないときは何度でも「よく分からないので説明し直してくれ」と相手に頼みます。

生返事でへんな言質など相手に与えてしまったら、仕事だとそれこそ致命傷になります。大事なポイントでは絶対にきちんとした理解ができるまで説明を受けます。いい加減な言質など取られたら、勝負事なら負けてしまう。

外交交渉は正味、勝ち負けのあるゲームですから、この一線はほとんど生命線と言っても過言ではありません。

外交官やそのOBに親しくさせていただく方が少なくありませんが、率直に言って、ネイティブのような発音の人ばかりではなく、明らかに日本人だと分かる人の方が多いように思います。

また自分の言葉の能力の限界をよくご存じで「僕などが話すと、何でもIt- that 構文だから・・・悪文ですよ（苦笑）」などという大使OBも少なくありません。

しかし、こうしたディプロマットの方々は例外なく、非常に慎重なタフ・ネゴシエータとして、日本国を全権代表する外交交渉の修羅場を、何度も潜り抜けてきておられます。

「地頭で考え、ここで1つ失敗したら、首が飛ぶ」くらいの覚悟で、相手の一言一句を聞き漏らさず、それを完全に理解し、自分の発言する一言一言にもロジカルに慎重です。

逆に、外交官でないケース、帰国子弟などでそれなりに綺麗な言葉を話すようにみえて、ロジカルな思考がぱっぱらぱーでどうしようもないことになった、というようなケースは、枚挙の暇がありません。

外国語を使って「話す」という能力で本当に必要なのは、母国語で話すときと同様の人間性や知性、ユーモアなども相手に伝え、人としては信用してもらいつつ、シリアスな交渉事については論理的に厳密にやり取りできることです。

不利な条件はそれとして認識して釘を刺し、有利な内容で交渉を妥結させる、粘り腰の対話術すなわち、古典文芸の自由七学科でいう「**ディアレクティクス**」**弁証法**の力にほかなりません。

これを最低限の合格ラインとして考えるとき、いま導入検討の「スピーキング」云々の議論、大半は、およそ国際的なビジネス現場、外交や防衛、学術や文化の交換に役立つものとは思われない。

辛いことを書くようですが、こんな、日本国内のごく一部でだけ通じ、可笑しなヘンサチのようなものだけ押し上げたり下げたりするようなものは、一種の迷信と言っても外れません。

「外国語能力」の涵養という観点からまともに機能するか、深く疑問を持たざるを得ません。

もっと根本的な問題から、日本の島国語学の慣習は性根を叩き直す必要があるように思っています。

(つづく)



© 2008-2018 Japan Business Press Co.,Ltd. All Rights Reserved